〔論　文〕

幼稚園児を持つ母親の育児ストレッサー分析

―ストレスフルだった出来事の記述回答を用いて―

平　田　祐　子*

Ⅰ．はじめに

本研究は、幼稚園児を持つ母親が日常的に感じている育児ストレッサー（育児ストレスの原因となるストレスフルな出来事）について分析する。母親が感じた育児ストレッサーに関する記述回答をKJ法(川喜田,1986)的手法によってカテゴリー化し、その深刻度に基づいてストレス状態に陥りやすいものがあるか否かを調査する。

育児ストレッサーとは、心理的ストレスモデル（Lazarus et al., 1984）に依拠すると、育児に関連するストレスフルな出来事のことである。心理的ストレスモデルの場合、ある出来事がストレッサーであるか否かの認識（認知的評定）だけでストレス状態に陥るのではない。ストレッサーであると認識された出来事が内的及び外的努力（コーピング）によっても解決されない場合にはじめてストレス状態に陥る。つまり、ストレッサーと考えられる出来事が、すべてストレス状態に陥る出来事となるわけではない。従って、これまでストレスの原因となるストレッサーへの介入研究だけでなく、コーピングへの介入研究（平田，2010）もあるが、ストレス状態に陥ることを防ぐ方法が数段階に分類できるため、本研究では、根本の育児ストレッサーを減少させる視点から、有効な子育て支援の在り方について考察する。

さて、これまで母親の育児ストレス状態の深刻化は、場合によっては子ども虐待をも引き起こすことなどから、多くの研究（牧野，1982；佐藤ら，1994など）がなされてきた。虐待予防の観点から、早期に育児ストレッサー等を多く抱えるハイリスクマザーを発見するための尺度開発研究も行われている（久保ら，2003）。

しかし、母親が実際にどのような出来事を育児ストレッサーと感じているかについて調査した研究（佐藤，1988；日下部ら，1999）は意外にも少ない。

育児ストレッサーについて捉えていると考えられる育児ストレッサーに関する尺度は、米国版を日本語版として訳した尺度（奈良間ら，1999）や、半構造面接によって得られた育児ストレッサーに関するデータから作成した尺度（西海ら，2008）などであり、その作成過程をみていくと、母親の育児ストレッサーについて包括的に捉えることができているとは言い難い。

さらに同じ母親であっても、育児ストレッサーは子どもの成長過程によって変化し（日下部ら，1999）、母親の職業形態等によっても異なる（永久，1995）。従って、より有効な支援を考えて育児ストレッサーを明らかにしようとする場合、母親の属性をある程度絞る必要がある。

よって、本研究では母親の中でも、とくに幼稚園児を持つ母親の育児ストレッサーについて焦点を当てる。幼稚園児を持つ母親の多くは専業主婦であり、職を持つ母親よりも育児ストレスが高い（久永，1995）と考えられている。また、この時期は乳児期よりも母子ともに社会関係が広がり、それまでにはなかった育児ストレッサーを起因とするストレス状態が想定される。より子育て支援が必要と考えられる幼稚園児を持つ母親に対象を絞ることで、この層の母親に対するより具体的な支援につなげたい。

また、現在我が国の次世代育成支援では子どもを産み育てやすい社会を目指し、様々な子育て支

キーワード：幼稚園児を持つ母親、育児ストレッサー、育児ストレス
＊関西学院大学大学院人間福祉研究科博士課程後期課程

援サービスの提供が始まっている。2010年１月に策定された子ども・子育てビジョン（内閣府政策統括官，2010）では、少子化対策から一歩進んで子育て支援への転換を謳っている。

次世代育成支援の観点からも、日常生活の中で母親がどういった出来事をストレスフルであると感じているのか明らかにし、ストレス状態に陥りやすい環境の改善を図ることは非常に重要である。

本研究が次世代育成支援の理念に見合った有効な子育て支援事業の発展に貢献することを期待する。

Ⅱ．目的

本研究の目的は、以下の２点である。

１．幼稚園児を持つ母親が日常的に感じているストレス状態の原因となった出来事を記述回答によって得、カテゴリー化することで、どのような種類の育児ストレッサーがあるのかを探る。

２．育児ストレッサーによって、深刻なストレス状態に陥りやすい種類があるか否かを探る。

母親が育児をすることはあたりまえであるとみられることが多く､その「つらさ」や「しんどさ」について、他者から理解が得にくいことが繰り返し言及されている。

特に幼稚園児を持つ母親は、時間的にも経済的にもゆとりがあるとみられることが多く、一般的にその援助の必要性が軽視されやすい。しかし、これまでの研究では、保育所に子どもを通わせる母親より、むしろ幼稚園に子どもを通わせる母親のほうが育児ストレスを感じやすい（久永, 1995）ことが示唆されている。専業主婦に対する子育て支援の重要性については、社会的にも除々に認知されはじめているが、実際にどのような出来事が育児ストレッサーであるのかが明らかにされていないため、本研究では、実際に母親がストレス状態に陥るに至ったストレスフルな出来事を訊ね、その具体像を明らかにしたい。

そこで、母親が実際に感じている育児ストレッサーについて分析するために、母親にここ2・3カ月の間にもっともストレスフルであった出来事を記述回答で答えてもらった。

「もっともストレスフルな出来事」としたことで、母親がより深刻と考える育児ストレッサーについてカテゴリー抽出を試みる。また、2・3カ月の間にもっともストレスフルだった出来事の深刻度についても回答してもらうことで、数ヵ月の間に母親が深刻なストレス状態を感じる程度についても調査する。

また、育児ストレッサーのカテゴリーとストレス深刻度の関係について調べることで、育児ストレッサーの中でも、より深刻なストレス状態に陥りやすいものとそうでないものがあるかを調査する。

Ⅲ．対象および方法

調査方法　質問紙調査法による。

倫理的配慮　個人情報の保護に配慮した。また、倫理的に問題のある項目がないかを調査する幼稚園にチェックしてもらった。

被験者　国立大学法人附属Ｘ幼稚園、私立大学附属Ｙ幼稚園及び私立大学附属Ｚ幼稚園の３園の母親。

調査手続き　2007年９月の第２週から第３週にかけて、各幼稚園を通して園児の母親に質問紙調査の依頼を行った。

調査内容

１）**被験者の属性**　母親の年齢･最終学歴･職業･子どもの人数・質問紙を持ち帰った子どもの年齢・性別及び第何子か。

２）**育児ストレッサー**　「ここ２・３カ月の間に、育児に関することであなたが最も困ったことや、いやだと感じたことをひとつ思い浮かべてください」とし､「あなたが思い浮かべられた困ったこと・いやなことはどのようなことであったでしょうか。差し支えのない範囲でお答えください。」といった教示によって得られた記述回答。

３）**ストレス状態の深刻度**　「またそのことはあなたにとってどの程度深刻なストレスを引き起こしていたでしょうか。もっともあてはまるところにチェックをして下さい。」と教示し､「非常に深刻だった」「かなり深刻だった」「やや深刻だった」「あまり深刻ではなかった」「全く深刻ではなかった」の５段階形式で、母親のストレス状態への深刻度の認知を測定する。

分析方法

1）**育児ストレッサーのカテゴリー抽出**　KJ法（川喜田，1986）的手法により、①記述回答にある、ひとつの育児ストレッサーにつき、1枚のカードを作成する。②その育児ストレッサーを簡潔にまとめるための1行見出しをつける。③同じ育児ストレッサーと考えられるものをサブカテゴリー（表札）に分類する。④カテゴリー化を行う。

2）**被験者の属性と育児ストレッサーカテゴリーの関係**　被験者の属性によって、KJ法的手法で得られた育児ストレッサーカテゴリーに差が見られないか調査をするため、「属性と育児ストレッサーカテゴリーには差がない」という帰無仮説をたて、フィッシャーの直接法による検定を行う。つまり、母親の学歴や子どもの数等により、育児ストレッサーが異なるかを調査する。

3）**育児ストレッサーカテゴリーとストレス状態の深刻度の関係**　深刻なストレス状態となりやすい育児ストレッサーカテゴリーとそうでないカテゴリーがあるのかを調査するため、「育児ストレッサーカテゴリーによってストレス状態の深刻度には差がない」という帰無仮説をたて、フィッシャーの直接法を行う。

なお、統計処理には、SPSS　16.0J　for Windows.を使用する。

Ⅳ．結果

1．回答者の属性

3園あわせて362通の質問紙を配布し、271通の質問紙が回収された（回収率75%）。そのうち205名が本研究で使用した記述回答欄に回答していたため、この205名について分析を行う。

被験者の属性は、母親の平均年齢が35.6歳（*S.D.*=4.11）、子どもの平均人数が1.93人であった。また、幼稚園児を持つ母親を対象に調査を行ったため、職を持たない母親が8割以上を占めた。その他、属性についてはTable 1に示した。

2．育児ストレッサーのカテゴリー抽出

得られた記述回答を、KJ法的手法によりカテゴリー化する。

この作業は、筆者を含め、博士課程後期課程の大学院生2名及び博士課程前期課程の大学院生1名の3名で行った。

1）まず、母親には、「最も困ったことや・いやだと感じたことを**ひとつ**思い浮かべてください」としているため、ほとんどの母親の記述している育児ストレッサーはひとつである。よって、基本的には一人の被験者に対して一枚の育児ストレッサーカードを作成した。ただし、「子どものけんか」「夫があまり育児に協力的でない」など、まったく違う育児ストレッサーと考えられるものが、羅列してあった場合は、複数の育児ストレッサーと見なし、一人の被験者から複数の育児ストレッサーカードを作成した。よって、205名の被験者から、213件の育児ストレッサーカードが作成された。

2）次に、育児ストレッサーカードに書かれた記述内容に対して、「一行見出し」を作成し、その被験者の訴える育児ストレッサーを簡潔にまとめた。

3）次に、サブカテゴリー（表札）として、同一の育児ストレッサーと考えられる育児カードを

Table 1

調査協力者の属性（205名）

母親の年齢	回答数	最終学歴	回答数	職業	回答数	子どもの数	回答数
21－25歳	1	中学	1	無職	170	1人	48
26－30歳	18	高等学校	29	パート	22	2人	127
31－35歳	82	短大・専門学校	111	フルタイム	3	3人	25
36－40歳	76	大学	62	その他	8	4人	3
41－45歳	22	大学院	2	無回答	2	5人	1
46－50歳	2	無回答	0			無回答	1

まとめた（Table 2）。

４）最後に、サブカテゴリーをカテゴリー化し、幼稚園児を持つ母親の育児ストレッサーのカテゴリーとした（Table 2）。

結果、「子どもとの生活（116件）」、「子どもと社会関係に関すること（61件）」、「母親自身に向けられること（19件）」、「社会的問題（８件）」、「家族について（5件）」、「将来に対する不安（３件）」の６カテゴリーが抽出された。

子どもとの生活（116件）　子どもとの生活の中では、「兄弟げんか（19件）」「反抗していうことをきかない（13件）」「食事について（10件）」など、母親が子どもとの家庭生活の中で経験する様々な出来事が育児ストレッサーとして挙げられている。

子どもと社会関係に関すること（61件）　子どもと社会関係に関することの中では、「子どもにまつわる親同士の人間関係（20件）」「子どものお友達関係（10件）」「子どもが身体的・心理的に他者を傷つける行為をする（6件）」など、乳児期よりも広がる人間関係に起因する育児ストレッサーが多数挙げられている。とくに、「子どもにまつわる親同士の人間関係（20件）」は、全サブカテゴリーの中でもっとも多く育児ストレッサーとして挙げられている。

母親自身に向けられること（19件）　母親自身に向けられることの中では、「子育てにおける自分に対する責め（５件）」「しつけに対する悩み（３件）」「イライラする自分をコントロールできないこと（３件）」など、自分自身に対して感じる育児ストレッサーが挙げられている。

社会的問題（８件）　社会的問題の中には、「サポートがない（６件）」「近所に子どもの遊び相手がいない（１件）」「不審者の増加（１件）」が挙げられている。これは社会的に子育て環境が十分整っていないことに関する不安・不満としての育児ストレッサーが挙げられている。

家族について（５件）　家族についての中では、「夫のサポートが不十分（４件）」「夫が子育てを否定してきた（１件）」「義母との関係（１件）」が挙げられている。子育てについて家族が協力的でなかったり、理解が得られないことで起こる育児ストレッサーが挙げられている。

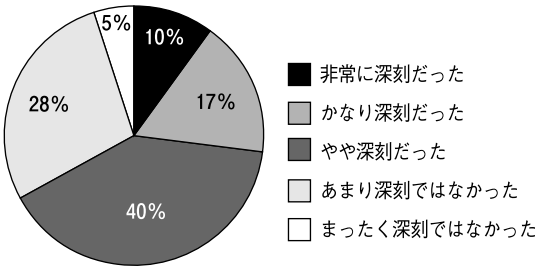
将来に対する不安（３件）　最後に、将来に対する不安の中では、「子どもの将来の心配（２件）」「今後仕事をしたいときの対応（１件）」が挙げられている。本カテゴリーが大きく他のカテゴリーと異なるところは、本カテゴリーのみ、次元が「現在」ではなく「未来」であり、将来への「不安」を育児ストレッサーとして挙げているところである。

３．記述回答で得られた育児ストレッサーの深刻度

記述した育児ストレッサーによるストレス状態の深刻度を５段階で評価してもらった。結果をFigure 1に示す。

結果、「非常に深刻だった（21件）」「かなり深刻だった（34件）」「やや深刻だった（83件）」「あまり深刻ではなかった（57件）」「全く深刻ではなかった（10件）」となった。

記述したストレス状態の深刻度について、「非常に深刻だった」「かなり深刻だった」としていた母親が25％を超えており、４分の１以上の母親が、ここ２・３カ月の間に深刻なストレス状態を感じていたことが示唆される。



ストレスの深刻度
Figure 1

４．育児ストレッサーカテゴリーと属性の関係性について

育児ストレッサーとなりやすい出来事は、属性によって差があるかを、フィッシャーの直接法で検定した。

育児ストレッサーカテゴリーとのかけあわせは、「子どもとの生活」と「子どもとの生活以外」に絞って行うこととした。「子どもとの生活」以外

Table 2

ここ２・３か月の間にもっともストレスフルだった出来事（育児に関するストレッサー）213件

カテゴリー	サブカテゴリー	回答数
子どもとの生活（116件）	兄弟げんか	19
	反抗していうことをきかない	13
	食事について	10
	子どもの健康面・病気	8
	寝るのが遅いなど生活リズムのくるい	6
	ぐずる・すねる	6
	片づけをしない	5
	子どもの性格	5
	精神面の不安定さ	5
	勉強について	5
	わがまま	4
	ダラダラ・のんびり	4
	ゲームのこと	3
	うそをつく	2
	おねしょ	1
	夜泣き	1
	運動能力が劣っている	1
	相談してくれない・話してくれない	1
	赤ちゃん返り	1
	子どもの生活全般及び情報不十分で分類不可	16
子どもと社会関係に関すること(61件)	子どもにまつわる親同士の人間関係	20
	子どものお友達関係	10
	子どもが身体的・心理的に他者を傷つける行為をする	6
	集団生活になじめない	4
	子どもが幼稚園で楽しくすごせない	3
	母子分離がうまくいっていない	3
	育児についてとやかく言われる	3
	自分の子に対する大人からの寛大さの欠如	2
	先生のわが子に対する対応	2
	習い事について	2
	子どもが身体的・心理的に他者に傷つけられた	2
	公共の場でのダダ	2
	他の親が幼稚園のルールをまもらない	1
	公共の場で静かにできない	1
母親自身に向けられること(19件)	子育てにおける自分に対する責め	5
	しつけについての悩み	3
	イライラする自分をコントロールできないこと	3
	自分の価値について	2
	自分の時間がない	2
	子どもに対しどうすればいいのかわからない	2
	子どもに我慢させてしまい申し訳ない	1
	自分の体調が悪い	1
社会的問題（８件）	サポートがない	6
	近所に子供の遊び相手がいない	1
	不審者の増加	1
家族について（６件）	夫のサポートが不十分	4
	夫が子育てを否定してきた	1
	義母との関係	1
将来に対する不安（３件）	子どもの将来の心配	2
	今後仕事をしたいときの対応	1

の「母親自身に向けられること」「家族について」「社会的問題」「将来に対する不安」は十分な数がないため、「子どもとの生活以外」としてまとめ、「子どもとの生活」と他の育児ストレッサーカテゴリーの間の、属性による差の有無について分析するに止めた。

また、フィッシャーの直接法にかけるために、属性についても適宜カテゴリー化を行った。①**母親の年齢**　母親の年齢を20代・30代・40代に３つのカテゴリーに分類した。②**母親の最終学歴**「中高卒」「短大卒」「大学卒以上」の３つのカテゴリーに分類した。③**職業**　「無職」「有職」の２つのカテゴリーに分類した。④**子どもの数**　「一人っ子」「兄弟あり」の２つのカテゴリーに分類した。

フィッシャーの直接法の結果、育児ストレッサーカテゴリーである「子どもとの生活」「子どもとの生活以外」と、４つの属性である「母親の年齢」「最終学歴」「職業」「子どもの数」の間にはそれぞれ、すべて有意な差がなかった（フィッシャーの直接法, $p>0.05$）。従って、帰無仮説「属性と育児ストレッサーカテゴリーには差がない」は棄却されなかった。

５．育児ストレッサーカテゴリーとストレス深刻度の関係

育児ストレッサーの種類によってストレス状態の深刻度が異なるか、フィッシャーの直接法による検定を行った。育児ストレッサーカテゴリーは先の分析と同じように「子どもとの生活」「子どもとの生活以外」に絞って分析することとした。

ストレス状態の深刻度については、「非常に深刻だった」「かなり深刻だった」「やや深刻だった」を『深刻度高群』、「あまり深刻ではなかった」「まったく深刻ではなかった」を『深刻度低群』とし、２カテゴリー化にした。

フィッシャーの直接法による検定の結果、育児ストレッサー「子どもとの生活以外」よりも、育児ストレッサー「子どもとの生活」のほうが、ストレス状態の深刻度について「深刻だった」と答えた人が多かった（フィッシャーの直接法, $p<0.05$）（Table 3）。

子どもとの生活に関する日常的なことは、他の育児ストレッサーよりも多く起こりやすく、かつ深刻なストレス状態を引き起こす育児ストレッサーになりやすいことが示唆された。

Table 3

カテゴリー「子どもとの生活」に分類された育児ストレッサーを挙げた母親とそうでない母親のストレス状態の深刻度

	深刻度低群	深刻度高群
「子どもとの生活」	45 65.2%	71 49.3%
「子どもとの生活」以外	24 34.8%	73 50.7%
合計	69	144

Fisherの直接法によるp=.039（両側検定）

Ⅴ．考察

本研究では、幼稚園児を持つ母親の育児ストレッサーカテゴリーとして、６カテゴリーが抽出された。カテゴリーは、育児ストレッサーとして挙げられた数が多かった順に、「子どもとの生活（116件）」、「子どもと社会関係に関すること（61件）」、「母親自身に向けられること (19件)」、「社会的問題（８件）」、「家族について（５件）」、「将来に対する不安（３件）」である。

子どもとの生活　子どもとの生活では、「兄弟げんか」「反抗していうことをきかない」「食事について」など、子どもとの日常生活で起こる出来事が育児ストレッサーとして挙げられている。これらは、幼児期の子どもを持つ親であれば日常的に経験する出来事である。従って、これらの悩みを母親が訴えたとしても「よくあること」と安易に片づけられてしまうことが危惧される。しかしながら、ここ２・３カ月の間のもっともストレスフルな出来事として、このような子どもとの生活に関する日常的な出来事が最も挙げられたということは、いかに日常的な出来事が母親にとってストレスフルな出来事であるかを示しているといえる。

これまで、育児は女性にとって喜びでもある反面、それに相反する感情もある（尾崎, 2002）と言われてきた。母親にとって育児が喜ばしいことである反面、ストレス状態に陥る原因ともなることが本研究においても示唆された。

子どもと社会関係に関すること　子どもと社会関係に関することでは、「子どもにまつわる親同士の人間関係」「子どものお友達関係」「子どもが身体的・心理的に他者を傷つける行為をする」といったことが挙げられた。子どもが幼稚園に通うことによって、母子ともに広がる人間関係の中での出来事が挙げられた。とくに、「子どもにまつわる親同士の人間関係」は、全サブカテゴリーの中でもっとも多く育児ストレッサーとして挙げられた。子どもを介する親同士の人間関係は、育児ストレッサーであることが少なくないと考えられる。母親同士の人間関係への配慮が重要であることが示唆された。

母親自身に向けられること　母親自身に向けられることでは、「子育てにおける自分に対する責め」「しつけについての悩み」「イライラする自分をコントロールできないこと」といったことが挙げられ、思ったようにできない自分自身に対して育児ストレッサーを感じていることがわかった。

他には、少数であるが、社会的なサポートがないことや、夫をはじめとする家族・親戚からのサポートがないこと、将来に対する不安などが育児ストレッサーとして挙げられた。夫からのサポートがない場合、母親のストレス状態は高いとする研究（牧野, 1982）が多いなか、本研究の結果では、あまり育児ストレッサーとして挙げられなかった。推測ではあるが、今回の調査では「育児に関することであなたが最も困ったことや、いやだと感じたこと」に関する記述を求めたため、育児に直接関連するストレッサーを母親が意識した可能性がある。

これまでの研究でよく使用されている母親の育児ストレッサーの分類に、佐藤ら（1994）の分類がある。子どもの問題から発生する「子ども関連育児ストレッサー」と母親自身の問題から発生する「母親関連育児ストレッサー」の２分類である。この分類に本研究で抽出されたカテゴリーを当てはめると、「子どもとの生活」「子どもと社会関係に関すること」が『子ども関連育児ストレッサー』に、「母親自身に向けられること」「社会的問題」「家族について」「将来に対する不安」が『母親関連育児ストレッサー』に分類されると考えられる。今回は「子ども関連育児ストレッサー」に関する記述が多かったため、育児ストレッサーは多くの母親にとって子ども関連育児ストレッサーを想起させることが考えられる。

本研究での育児ストレッサーカテゴリーの分類とその他の研究の分類を見てみると、日下部ら（1999）の研究の3歳児を持つ母親の育児ストレッサーの項目と、本研究で抽出されたカテゴリーでは、日下部ら（1999）の調査で抽出された項目はすべて本研究のサブカテゴリーに当てはめることが可能である。しかし、サブカテゴリー「子どもにまつわる親同士の人間関係」のみ、これまでのどの育児ストレッサーの尺度（佐藤ら，1988；日下部ら，1999；奈良間ら，1999；吉永ら，2006；西海ら，2008）の項目にも当てはまらなかった。とくに、佐藤（1988）は、育児に関連するストレッサーのデータを、母親から記述回答式で収集している。対象者が幼稚園児を持つ母親であることから、本研究と類似の結果が想定される。しかし、佐藤（1988）の調査でも、この項目は見当たらない。調査が約20年前のものであることから、時代的な背景を受けて母親の育児ストレッサーの構造が変化したと考えられる。

さらに特筆すべきは、このカテゴリーが全サブカテゴリーの中でも、もっとも多くの育児ストレッサーとして挙げられていることである。

いわゆる“ママ友”の存在は、インフォーマルなサポート資源として、ストレス状態の軽減につながることが考えられる。しかし、同時に育児ストレッサーにもなりうることが示唆され、子育て支援における母親同士の人間関係への配慮の重要性が示唆された。

また、育児ストレッサーとストレス状態の深刻度の関係について、カテゴリーごとのデータ数が少なかったために、一部のみの分析となったが、「子どもとの生活」が、「子どもとの生活以外」よりも深刻なストレス状態に起因する育児ストレッサーとなることが示唆された。この結果から、子どもとの生活で起こる出来事は、より深刻なストレス状態を引き起こす可能性があるため、それを踏まえた援助が必要であるといえる。

以上を踏まえると、育児に対する日常的な悩み等を相談することのできる援助機関の重要性が考えられる。また、保育所に子どもを通わせる母親よ

りも、幼稚園に子どもを通わせる母親のほうがストレス状態は高い（永久，1995）といわれているのは、ストレスフルな出来事が起こりやすい、「子どもと過ごす時間が長いため」であるとも考えられる。先に見たように、母親の育児に関する感情はアンビバレント（尾崎，2002）である。多様化する価値観の中で揺れ動く母親（柏木ら，1999）にとって、子どもと向き合う時間は幸せな時間でもあるが、長時間子どもと接することによるストレスもある。これを緩和するためにも、母親がより育児の時間を楽しめるように、今後適宜リフレッシュの時間が取れるような子育て支援事業の整備が必要であると考える。

Ⅵ．結語

本研究では、幼稚園児を持つ母親の育児ストレッサーカテゴリーとして、「子どもとの生活」、「子どもと社会関係に関すること」、「母親自身に向けられること」、「社会的問題」、「家族について」、「将来に対する不安」が抽出された。また、育児ストレッサー「子どもとの生活」は「子どもとの生活以外」よりも深刻なストレス状態に陥りやすい育児ストレッサーであることが示唆された。また、全サブカテゴリーの中で、「子どもにまつわる親同士の人間関係」がもっとも多く育児ストレッサーとしてあげられた。

本研究では、幼稚園児を持つ母親のみを対象とし、幼稚園児を持つ母親特有の育児ストレッサーについて探ることを試みた。今後、保育園児を持つ母親にも同様の調査をすることで、抽出される育児ストレッサーカテゴリーを比較し、それぞれの母親の必要とする子育て支援サービスが同一でないことを明らかにしたい。また、幼児期の子どもを抱える母親のストレッサーは育児に関連するもののみではないであろう。子育て支援から子育て期支援への転換の必要性もある。今後、母親である女性の様々なニーズに対する支援の在り方をより具体的に探っていきたい。

謝辞：本論文は、平成20年１月に滋賀大学に提出した修士論文のデータの一部を分析し直し、大幅に加筆修正しました。指導教官である滋賀大学教育学部教授の菅眞佐子先生と、引き続き指導していただきました指導教官である関西学院大学人間福祉学部教授の芝野松次郎先生に記して感謝申し上げます。また、調査に快くご協力くださいました、幼稚園の先生とお母様に感謝申し上げます。

【文献】

平田祐子（2010）コーピングタイプと精神的健康との関係に関する研究の動向．Human Welfare，2；5-16.

柏木恵子，永久ひさ子（1999）女性における子どもの価値――今，なぜ子を産むか――．教育心理学研究，47，170-179.

川喜田二郎（1986）KJ 法．中央公論社

久保由美子，長尾秀夫，宮内清子（2003）母性意識質問紙による育児環境ハイリスクマザーの早期発見に関する研究――母性意識質問紙の信頼性・妥当性の検討――．愛媛大学教育学部紀要，49（2），79-86.

日下部典子，坂野雄二（1999）育児に関わるストレッサーの構造に関する検討．ヒューマンサイエンスリサーチ，8，27-39.

Lazarus, R, S., & Folkman, S.（1984）*Stress, appraisal, and coping.* New York : Springer.（本明寛・春木豊・織田正美監訳（1991）『ストレスの心理学［認知的評価と対処］』．実務教育出版）

牧野カツコ（1982）乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞．家庭教育研究所紀要，3，34-56.

永久ひさ子（1995）専業主婦における子どもの位置と生活感情．母子研究，16，50-57.

内閣府政策統括官（2010）子ども・子育てビジョン．策定.

奈良間美保，兼松百合子，荒木暁子，他（1999）日本版 Parenting Stress Index(PSI) の信頼性・妥当性の検討．小児保健研究，58，610-616.

西海ひとみ，松田宣子（2008）第１子育児早期における母親の心理的ストレス反応に影響する育児ストレッサーとソーシャル・サポートに関する研究．神大院保健紀要，24，51-64.

尾崎康子（2002）幼児に対する母親と父親の養育態度―親意識とパーソナリティ要因からの検討―．家庭教育研究所紀要，24，40-46.

佐藤達哉（1988）育児期母親の育児関連ストレス・

対処・サポートについての基礎的研究．児童育成研究，6，42-55.
佐藤達哉，菅原ますみ，戸田まり，他（1994）育児に関するストレスとその抑うつ重症度の関連．心理学研究，64（6），409-416.
吉永茂美，眞鍋えみ子，瀬戸正弘，他（2006）育児ストレッサー尺度の作成の試み．母性衛生，47，386-396.

Analyzing the causes of parental stress in mothers of kindergarteners through the use of descriptive answers of stressful events

Yuko Hirata *

ABSTRACT

Using data collected from descriptive answers regarding parental stressors in mothers of kindergarteners, the factor structure was clarified using qualitative research methods. Research was also done to find out if the severity of the stressor varied by category.

The factor structure of stressors was comprised of these six categories , listed in descending order: "living with the child (n=115)," "social relations related to the child (n=61)," "matters relating to the mother herself (n=19)," "social problems (n=8)," "family matters (n=5)," and "uncertainty about the future (n=3)."

Moreover, it was suggested that causes relating to "living with the child" resulted more often in serious incidences of stress than those relating to factors "other than living with the child."

Furthermore, amongst subcategories, "relationship between parents in connection with the child (n=20)" was the greatest stressor, and this suggests that the relationship between parents as a stressor is a particular feature of kindergartener mothers.

Key words: kindergartener mothers, parental stressor, parental stress

* Doctoral Program, Graduate School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University